探索・神長倉真民

——補説『会社という言葉』(4)——

馬　場　宏　二

前々稿[1]で神長倉真民の名を挙げ，前稿[2]でその歴史学に照明を当てた。だが到底これで語り尽くせる人物ではない。経歴も多彩だが，著書は12冊，いずれも型にはまらぬ活きた筆致で書かれている。主題は閥族・能率・内外経済・経済史・経済学史と多方面に渉り，それぞれに先駆的で刺戟的である。中でも晩年の，財政を焦点とする幕末維新史３冊は，新資料発掘を含む問題提起として，歴史学界の高い評価を得て不思議はなかった。ところが学界が問題にしたことが殆どなく[3]，引用されても目を惹かない[4]ためか，現存の歴史家でその名を知る人がない。つい先頃出版された，高村直助『明治経済史再考』[5]が唯一例外である。そうした状況に対応するのだろうが，各種人名辞典・著作者名辞典にも神長倉の名はない[6]。これだけ有意義で魅力的な文筆家の名が，なぜか公衆に殆ど知られていないのである。

他人頼みでは何も判らない。前稿準備前から手探りで探索を始め，今年に入って多少深入りをした。未だ完成の域には達しないが，略年譜なら示せるところまで来た。またその過程で，神長倉の著書や雑誌記事を漁り，諸著作間の関連を捉える傍ら，前稿の誤りもいくつか見出した。そこで本稿では，前稿の訂正を含めつつ，主として経歴を示す。といっても，実生活に関する資料は極めて少ないから，活きた人物像はまだ正確に描けず，文筆家としての経歴が中心になる。

そればかりか，資料の確かさも完全には示し得ない。近頃急に煩くなった，個人情報保護法やら情報公開法やらのおかげで資料破壊と情報秘匿が進み，探索が著しく困難になった。のみならず，正確のためや感謝のために情報源を目一杯書くと，逆にとんだ御迷惑を及ぼす恐れもある。神長倉人物史は文書資料が極めて少なく，二次的文献と伝聞と推理に依拠して大筋を辿るしかない。そこへ個人情報保護などと居丈高に叫ばれると，追跡可能なほど資料開示ができなくなる。何事にもアメリカの猿真似をしたがる時代風潮が齎した歴史破壊，日本文化の自己破壊である。そうした制約を承知の上でお読みいただきたい。

1.　探索の粗筋

そもそも神長倉真民をカナクラマサミと読むのは結構難しい。著者名に仮名をふった本もあるから，著書を全部見れば判るが，完全に見られる図書館はない。国会図書館はカナクラマサミと正読し，神長倉真民著で13点表示しているが，２点が重複表示で実は11冊しか持たない。大学図

書館NACSIS-WEBCATで探すと，国会図書館所蔵中の2点がなくて9冊，逆に非所蔵2点の表示があって総計11冊になる。だがこちらにも表示不完全があるうえ，数冊持つ大学でもカナクラとカミナガクラを併用したりする。すでに姓名の音読自体が面倒なのである。

ついで神長倉という姓が珍しい。普段まず聞かない。『姓氏大辞典』の類でも，どの地方の姓か判らない。娘がインターネットで探して，神長倉姓の人物がしかるべき地位に就いているのは福島県だと教えてくれた。幸い家内が学童時代に福島市に住んでいたので，同級生の河野秀作氏にお尋ねした。氏は，電話番号簿で調べたところ，県内浜通り，特に浪江町に神長倉家が複数あると教えてくださった。浪江町役場も御尽力くださり，室原地区に神長倉家が纏まってあるとまでは判ったが，神長倉真民に直接する情報はなかった。

東北地方と見当がついたので，先輩斎藤仁氏に御指導を仰いだ。歴史に詳しく特に東北地方に詳しい。調査経験豊富な農業経済学者だから地誌的側面にも知識がある。探索過程全体を通じて，制度・慣習等具体的な諸事態の解釈でよろず相談出来，大いに教えられた。

他方で，神長倉最初の著書である『閥族の解剖』を探った。友人横山柳村の跋文に，神長倉は天野博士の推薦で中央銀行に入ったが，雑誌『ニコニコ』に聘ばれたので辞め，次いで雑誌『義勇青年』を経営し，その後雑誌『日本一』の編集長を勤めたとある。経歴が纏まって判ったのはこれが初めてだった。当時の文体なので，すぐに細部まで正確には摑めなかったが，中央銀行は日銀だろう，天野博士は天野為之だろうと推測した。神長倉の著書の一つが早稲田実業学校の出版なので，そこから早稲田実業学校に問い合わせ，戦災で資料を失ったが，明治36年の成績簿にその名があることを，日銀からは生年月日と在職期間をご教示いただいた。初めて確かな年次が判り，輪郭が急に鮮明になった。

文献検索も続けた。特に大東文化大学図書館の前田昌子司書が，己がことのような熱心さで情報源を見出してくれた。福島，青森両県立図書館との連携，雑誌『日本一』と『婦人家庭雑誌』の発見は特に有益だった。

福島県内をもうすこし探すつもりで，今年3月初め福島県立図書館を訪れた。遠藤豊司書が，文献を取り揃えるなど大変熱心に援助してくれた。おかげで福島事件当時の県内事情は，全く初めて触れたのに良く解った。これは基礎知識として実に有用だったが，神長倉真民に直接する情報はない。後に役立ったのは，『浪江町史』にある，室原地区周辺では小野田・神長倉両家系が養子・婚姻等で交錯していたことを示す記述[7]だった。

同じ頃，旧知の吉原泰助福島大学名誉教授に，神長倉姓について手がかりを訊ねた。直接には御存知なかったが，御講演時に接触したという，小高町の郷土史家佐藤鶴雄氏を紹介してくれ，佐藤氏が探索の挙げ句浪江町在住の神長倉光氏を見付けてくださった。東京在住の，神長倉真民の子孫と名乗った方と，同姓の縁で電話で話したことがあるそうだとのご紹介だった。

令孫神長倉伸義氏とはまず電話で接触出来，神長倉真民は青森県出生だと判った。そこで前田司書に青森県立図書館へ問い合わせてもらい，同館郷土資料室の清水司書が，神長倉真民が雑誌『陸奥の友』に，早稲田実業学校幹事の肩書きで「出鱈目の記」[8]を寄せていたのを見付けてく

れた。やがてコピーも届いた。そう長くはないし，いささか韜晦もあるが，多くの有意な情報を含む。纏まった自伝的文章は，この他には『新興コンツエルン物語』の著者略歴しかなかった。

4月下旬，神長倉伸義氏を勤め先の文藝春秋社にお訪ねした。氏は神長倉真民没後のお生れで，御両親も伯母様夫妻も亡くなられ，もはや真民と面識のある縁者はいない由。遺された記録を頼りに，家族や経歴について最大限教えてくださった。当面最大の収穫は逝去の時と所が判ったことだが，併せて，家系のルーツは福島県旧相馬藩領内の小野田家で，県会議員だった小野田知義につながる縁がある，父神長倉義真はもともと小野田姓で，仙台の東北鎮台から西南戦争に従軍して功があり，神長倉姓となって青森の浦町に住んだ，などを伺った。因みに小野田知義は福島事件の後で岩子村から選ばれた中立派議員で，事故で退職している。これは後に遠藤司書が資料を見付けてくれた。

神長倉伸義氏訪問の後，早稲田実業学校へ校史類を見せて貰いに行った。後藤浩一氏が対応してくださり，『早実七十五年誌』[9]，同追補，『百年を彩る人びと』[10]を閲覧できた。別途読んだ『早稲田大学商学部百年史』[11]と併せて，早実の歴史や天野為之と早稲田騒動の関係等の周辺情報がかなり得られ，早実幹事時代の神長倉真民についても直接情報が多少は得られた。だが残念なことに，神長倉は幹事を勤め早実叢書も出していたのに，大隈重信・英麿，天野為之は無論として王貞治や竹久夢二，藤原義江をも含む人物史[12]の中に取り上げられていなかった。

期待外れだったのがダイヤモンド社。当然思い付く情報源だから早目に問い合わせたが，自社の歴史や先輩記者についての記憶も残らず，文書資料も保持してはいるが未整理で使えぬ由。既発行誌の利用さえ制限する。刊行された社史に25年史と75年史がある[13]が，前者の年表に大正13年11月神長倉真民入社とあるのに退職の記録がなく，後者には社員個人の記事がない。しかもそのこと自体記憶されてもいない。驚いたのが早稲田大学。神長倉の著書を蒐集してないばかりか，個人情報保護とやらで校友会名簿さえ見せない。「進取の精神・学の独立」と無縁の小役人根性である。友人某教授に頼んで見てもらうと，神長倉の名は名簿にないとのこと。大学部は出ていないようだ。

ダイヤモンド社と早稲田実業学校が，理由は異なれ，全く顕彰せず，早稲田大学と歴史学界が頭から存在を無視したとあっては，神長倉真民が知られざる傑物として埋もれてしまっても致し方ない。

これで探索は一段落した。その後，資料確認の意味で6月末から7月初めに弘前・青森へ赴き，両図書館で追加資料を見，ここまでの知識で，8月に一旦探索記を纏めた。ところが，旧知の戸塚茂雄青森大学教授が，範子夫人と御夫妻で神長倉探索に強い関心を示され，以後青森での情報蒐集を強力に御援助くださったため，いくつかの追加情報が得られた。しかも氏の影響で『東奥日報』9月2日に探索記事が載ったため，さらに追加情報が得られた。そこで一旦纏めておいたものにこれら追加情報を加えて整理し直した。それが本稿である。

2.　略歴と著作一覧

まず，情報の骨格的部分を示す。人物像の肌理細かい側面は文章で表現する方が適切なので，後の節に回す。

神長倉真民　略年譜

1885	明治18年３月24日	青森県浦町村（現青森市）生れ
1895	明治28年	青森県師範学校（現　弘前大学教育学部）付属小学校高等科卒業
1899	明治32年	東京に出る
1901	明治34年３月	早稲田実業中学開設
1902	明治35年10月	天野為之　早稲田実業学校校長
1903	明治36年	神長倉真民　早稲田実業学校に在籍記録
1904	明治37年４月	早稲田実業学校第一回卒業証書授与式
1905	明治38年１月	神長倉　天野為之の推薦で日本銀行に就職
1909	明治42年10月	日本銀行退職
?	?	雑誌『ニコニコ』入社
1910	明治43年？月	藤本豊トヨと結婚
1912	明治45年４月	父義真を失う
1915	大正４年10月	雑誌『義勇青年』創刊
1916	大正５年６月	雑誌『日本一』編集主任
1917	大正６年５月	著書『閥族の解剖』刊
1917	大正６年10月	『日本一』主筆
1918	大正７年10月	『婦人家庭雑誌』創刊
1918	大正７年12月	天野為之　早稲田実業学校校長に再任
	同年同月	神長倉真民　早稲田実業学校幹事に就任
1920	大正９年９月	弘前音楽研究会大演奏会　写真
1920	大正９年11月	早稲田実業学校生徒130名退学　翌月撤回
1921	大正10年１月	『陸奥の友』に「出鱈目の記」掲載
1921	大正10年８月	『サイエンティフィックマネージメントの研究』早実叢書
1923	大正12年３月	早稲田実業学校幹事辞任
1923	大正12年	武藤山治に随い政治運動
1923	大正12年５～８月	『ダイヤモンド』誌に「新東京記」９回連載
1923	大正12年９月	関東大震災　『科学的に…』の原稿焼失
1924	大正13年３月	『科学的に研究した執務能率増進法』刊
1924	大正13年５月	青森一区から総選挙に立候補，落選

1924　大正13年７月　　『能率学講話』刊
1924　大正13年９月　　『事務能率の研究』
1924　大正13年11月　　『執務能率講話』刊
1924　大正13年11月　　ダイヤモンド社入社
1925　大正14年10月　　母つねを失う
1926　大正15年５月　　ダイヤモンド誌に「同人消息」　海外生＝神長倉・筆？
1926　大正15年11月21日号～大正16年１月１日号
　　ダイヤモンド誌，かなくら生「郊外電車めぐり」５回連載
1927　昭和２年４月　　ダイヤモンド誌，海外生「工場巡礼記」３回連載
1929　昭和４年７月　　『米国の金融市場』ダイヤモンド社刊
1930　昭和５年５月　　『財界巡礼記』刊
1932　昭和７年10～12月　ダイヤモンド誌，芋作生「移れば変る世相行脚」連載
1933　昭和８年１月　　ダイヤモンド誌，芋作「維新経済史抜読」連載開始
1935　昭和10年１～３月　ダイヤモンド誌，神長倉生「万華鏡」６回連載
1935　昭和10年６月　　『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』刊
1935　昭和10年８月　　ダイヤモンド誌，神長倉生「維新経済秘史」連載開始
1936　昭和11年７月　　『明治産業発生史』刊
1937　昭和12年６月　　経済マガジン誌創刊，神長倉，同誌に執筆
1938　昭和13年４月　　ダイヤモンド誌，理研コンツエルン論３回連載
1938　昭和13年５月　　ダイヤモンド誌　日曹コンツエルン論
1938　昭和13年５月　　経済マガジン誌　新興コンツエルン論　林慎之助
1938　昭和13年６月　　経済マガジン誌　日曹論　林慎之助
1938　昭和13年７月　　神長倉真民，ダイヤモンド社退職
1938　昭和13年８月　　経済マガジン誌　森コンツエルン論　林慎之助
1938　昭和13年９月　　経済マガジン誌　日窒コンツエルン論　林慎之助
1938　昭和13年10月　　経済マガジン誌　理研コンツエルン論　林慎之助
1939　昭和14年４月　　『新興コンツエルン物語』ダイヤモンド文庫
1943　昭和18年７月５日　神長倉真民　東京市世田谷区下北沢で逝去
1943　昭和18年12月　　『明治維新財政経済史考』刊

つぎに同じく骨格的情報である，著書一覧を掲げる。

神長倉真民　著書一覧

＊『慰安と修養』南条文雄・村上専精・前田慧雲共述，神長倉真民編集　泰山堂，大正６年２月21日発行

三著者は著名な仏教学者。奥附に編者神長倉真民とあるが寄稿を集めた意味

＊『閥族の解剖』　四方社，大正６年５月15日発行　神長倉の処女作　660p.

＊『サイエンティフィックマネージメントの研究』早稲田実業学校，早実叢書　大正10年８月刊　70p.

＊『科学的に研究した執務能率増進法』　著者・発行者とも，小石川区音羽３－７　神長倉真民。大正13年３月23日発行　652p.

＊『能率学講話』　著者・発行者とも同上住所神長倉真民，大日本能率研究所，大正13年７月10日発行，表紙の著者名にかなくらまさみ，と仮名　317p.

＊『執務能率講話』　著者神長倉真民，発行者同住所吉原豊彦，大日本能率研究所，大正13年，11月１日発行　344p.

＊『事務能率の研究』　大日本能率増進研究所長神長倉真民講述：編集者大阪市役所商工課，能率増進研究会刊，大正13年９月８日，160p. 大阪府立中央図書館所蔵。：同文を別途，工業教育会「職工問題資料」大正13年１月13日，同年２月12日，４月11日，９月19日，10月５日，11月６日，12月５日に分載。

＊『米国の金融市場』　ダイヤモンド社，昭和４年８月２日発行　318p.

＊『財界巡礼記』　千倉書房，昭和５年５月15日発行　320p.

＊『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』　著者兼発行人　世田谷区上北沢940　神長倉真民，ダイヤモンド社，昭和10年６月27日発行　473p.

＊『明治産業発生史』　著者兼発行人　世田谷区北沢３－940　神長倉真民，ダイヤモンド社，昭和11年７月15日発行　543p.

＊『新興コンツエルン物語』　ダイヤモンド文庫，昭和14年４月20日発行　244p.

＊『明治維新財政経済史考』　東邦社，昭和18年12月20日発行。奥附の著者名に，かなくらまさみと平仮名。490p.

以上の骨格的情報を踏まえて，以後，資料の細部や確からしさにやや立ち入った論及をする中で，人物像に多少の生命感を与えたいと思う。

3.　ジャーナリストへの道

神長倉真民は，青森県浦町村（現青森市）生まれ。神長倉義真・つねの事実上の独り子。幼少時は両親のもとで育ったのであろう[14]。青森市が大火・戦災双方に遭ったため資料が整わない[15]が，明治28年，青森師範付属小学校高等科卒業[16]。12歳卒業のところを10歳で卒業したのだから繰上入学か飛び級があったはず。「出鱈目の記」で算えれば東京へ出たのが14歳。なお数年間親許にいたことになる。地元の中学にでもいたか？　東京へ出てすぐ何をしたかも判らない。父が年俸を授与される身だから，働くために上京したのでなく進学していたのだろう。

上京２年後の1901年，早稲田実業中学が開設され，翌年早稲田実業学校と改名し，設立に働いた天野為之が校長になる。03年に神長倉が在籍していたことは確かで，04年に早稲田実業学校第１回卒業証書授与式があり，神長倉は明治38（1905）年１月に天野の推薦で日本銀行に入っているから，資料不充分だが，早実開設後すぐ入学して３年間で本科を卒業したと考えると辻褄が合う。多分，際立って良く出来る生徒だったのだろう。因みに早実は英語教育に力を入れていたから，後に高い海外情報吸収力を発揮した基礎は，早実の教育で築かれたものと思われる。

日銀は著名な企業であっても楽しい職場ではなかったろう。学士でなく，早実と直結した早稲田大学商学部も出てない。能力はあっても下積みで出世の見込みはない[17]。山っ気もある躍動的な性格だから，正確さばかり要求される下っ端仕事の繰り返しは性に合うまい。横山柳村によれば『ニコニコ』から招ばれたためだが，ともかく09年に日銀を罷めた。「出鱈目の記」で拾年前と言っているから，1910年に25歳で，日銀辞職後に結婚した計算になる。妻は東京の女性の由。神長倉の文章には，時々彼女に言及した語句がある。

以後がジャーナリスト時代である。『ニコニコ』は明治44（1911）年創刊で，グラビアに著名人のニコニコ笑う写真を掲げ，いつもニコニコしていれば暮らしが良くなると庶民を教導する啓蒙誌である。創刊が神長倉の日銀退職より２年後なので，『ニコニコ』から招ばれたから日銀を辞めたと言うと辻褄が合わなくなるが，創刊年の諸号が見られず，詳細は解らない。神長倉筆の記事の初めは明治45年１月号のインターヴュー。その後も書いているが，神長倉筆と判るものはそう多くない。生活はそれなりに安定したとしても，雑誌社にいながら執筆意欲は満たされなかったろう。数年で自前の雑誌を創刊し自立する。

『義勇青年』はイギリスの義勇青年団がモデルで，国際的に流行ると踏んだ企画らしいが，あるいは自分が数多く書くために創刊したのか。一号に複数の記事を書き，肩書きで理事と名乗り，奥附に印刷人神長倉真民とある。横山柳村が書いたように神長倉自ら作った雑誌である。資金をどう工面したかは判らない。明治45（1912）年に父義真は亡くなっていた。東大明治文庫が持つのは大正４（1915）年10月の創刊号と大正５年３月の第２巻第３号だけだから，多分三号雑誌で潰れたのだろう。読みが外れたか資金が続かなくなったか。ただ『ニコニコ』以来培った人脈は後の糧になったであろう。横山柳村，通俗史家の福本日南らがいた。

さて神長倉は，大正５年６月に雑誌『日本一』に編集主任の肩書きで登場する。同誌は大正４（1915）年創刊，南北社発行の，大衆娯楽性を含むオピニオン雑誌である。編集委員は中野武営・浮田和民・志賀重昂・和田垣謙三。大隈重信が毎号登場するから，大隈人脈早稲田系の雑誌だが，三宅雪嶺や新渡戸稲造もしばしば寄稿している。神長倉が創刊時から入社していたか，初めから編集主任だったかは確認できないが，既に30歳。ここまでにジャーナリストとして令名あったろうし，早稲田人脈でもあるから，期待されて入ったのだろう。1917年10月，彼は文学士小野秀雄の後を襲って主筆になった。

編集主任時代に彼は『慰安と修養』を編集し『閥族の解剖』を出版した。前者は真宗の著名な仏教学者僧侶３人の人生論を集めて並べただけで，神長倉は奥附に編者とあるものの表には名が

なく，『日本一』の名声で著名３僧から原稿を集めて出版しただけであろう。これに対して『閥族の解剖』は神長倉の処女出版であり，政界・財界・元老・俳句界・宗教界・文壇各界に渉って，閥の存在を明らかにする。驚くべき情報蒐集力だが，既に経験を積み，人脈もあり，それに『日本一』特に友人記者丸山博章が絶えずこの種の事態を取材していたから，著者にとってはさほど難しくなかったかも知れない。

『日本一』で彼はのびのびと筆を振るった。大正５（1916）年６月，第２巻第６号に編輯主任の肩書きで記事を載せて以降，ちょうど２年後の第４巻第６号まで，殆ど毎号書いている。誌を代表する意見や鮮度の高い人物論が主だが，時に物知りコラムのような軽い文も含む。雑誌の始祖は1665年フランスで創刊された Journal des Sçavants だと，大抵の人が驚くような知識が，穴埋め欄にさりげなく書かれている。１号に複数書いた場合が多数あり，大小取り混ぜ３本書いていたりする。署名は神長倉生が普通だが，かなくら生だったり真民生だったりもある。そしてその他に，文体と内容から神長倉筆と思われるのに，全く別の署名になっている文もある。上記２年間に40本ほど書いたのではないか。改めて言うまでもなく，この間に『慰安と修養』を編輯し，『閥族の解剖』を書き下ろしていた。

大正７（1918）年７月以降，突然神長倉の文が現れなくなる。前年10月主筆に昇格したばかりだから，不都合があったのではなかろう。雑誌自体の性格が変わるのはずっと後である。同年末に早稲田実業学校幹事に就任するから，年末退社なら理解出来るが，その半年前である。神長倉のように筆力旺盛な人物がなぜ書かなくなったか。『婦人家庭雑誌』[18]の創刊準備で忙しかったのか？

同誌は1918年10月創刊の婦人向け実用・経済啓蒙誌で編輯人兼発行人神長倉真民。常連寄稿者に天野為之や石山賢吉，鳩山春子がいた。まもなく神長倉が専念出来なくなったためだろうか，1920年８月から，ダイヤモンド社が引き取った。

4.　早稲田実業学校幹事

神長倉は1818年末に早稲田実業学校幹事に就任し，1923年３月までの４年あまりを母校に勤めた。この転職はおそらく，いわゆる早稲田騒動と関わる。

早稲田騒動は，1915年４月に第二次大隈内閣が成立し，８月の改造で文相に学長高田早苗が就任，天野為之が第三代学長となったことに胚胎する。大隈内閣は1916年10月総辞職し，高田が手空きになった。そこで17年６月，天野排除・高田学長復活運動が起きた。真因・是非善悪は知るところではないが，早稲田関係者は二派に別れて大騒動となった。『日本一』も，大正６（1917）年第３巻第９号で，早稲田の学長，高田天野いずれが是かのアンケートを関係各界名士から集め，翌10号では校友から意見を徴している。纏めたのは編輯主任神長倉真民である。

この騒動で天野は同年８月，学長を辞任する。表向きは任期満了だが，講師・評議員とも大学の地位全てを失った。早実側には支持があったらしく，１年以上期間を経て天野は古巣の早稲田

実業学校に校長として復帰する。ところが早実にも早稲田騒動が及んでいて，教員連は天野校長反対でストをし，天野着任後は多数が辞職した。おそらく天野はその再任時に，頼りになる味方神長倉が幹事に就任することを欲し，神長倉も従来の恩義からこれに応えたのである。

「幹事」の職務は正確には判らない。『早実七十五年誌』から推測すると教頭と事務長を兼ねたようなものらしい。実際，記録は極く僅かだが，神長倉は教務的な生徒指導もやり，実権派的汚れ役も担ったと見られる。

時点が明確でないが，神長倉が先輩として講話部（弁論部）の指導をしてくれたという卒業生の回顧文がある[19]。津軽弁で育ちながら矯正して東京弁をしゃべるようになっていた。頭が雄弁の質である。後には政治運動に飛び込んで雄弁家と評されてもいる。早実で講話部を指導したのはさもありなんである。

汚れ役は，大正９（1920）年11月始め，神長倉が生徒130名に一斉退学を申し渡したことである。当時の朝日・読売等中央紙に載り，神長倉が「出鱈目の記」で触れ，校史にも記されている[20]から，事実は否定できないが，理由は判らない。「出鱈目の記」は，生徒たちの悪戯が暴力的でなくなった代わりに一斉に嘘を続けるといった姑息な授業妨害になり，一括除名処分したが，一度くらい殴られることも覚悟していたのに新聞に訴えるくらいで直接には何も言ってこない，若い者がこんな軟弱でどうする，と怒り嘆いている。天野校長も，新聞にこの連中をテコズリ学級だと語った。授業妨害が酷いので学校側もそれなりの考慮があって処分したのだろうが，申し渡したのは神長倉らしい。勉強嫌いの甘ったれ集団が度の過ぎた悪戯を止められなくなっていたのか，辞職教員の策謀で早稲田騒動の余波が残っていたのか。いずれにせよ処分は10日余りで撤回された。撤回は人物史の年表に一言あるだけで，事情は全く判らない。気力ある神長倉がこういう際の汚れ役にうってつけだったことは容易に想像できる。

神長倉はもっと大きな指導もした。『サイエンティフィックマネージメントの研究』は，早実上級生が組織した「商業経営研究会」の依頼で行なった学内講演の記録であり，早実叢書として1921年８月に出版された。テーラー説の紹介で，大きな本ではない。神長倉は以前から科学的管理に注目し，1917年『日本一』第３巻第８号に「米国よりの最新情報　能率増進十ケ条」を載せていた。予ての研鑽が実業教育の場で活きた。ここから事務所管理論へと傾斜が生ずる。

『陸奥の友』は在京青森県人会の雑誌。執筆陣に青森県出身の名士が並ぶが，早稲田鶴巻町で出版されているから県内誌ではない。神長倉は執筆を今君に頼まれたと書いている。今君とは編輯者今周而だろうという。

「出鱈目の記」は，東京へ出て21年，嬶を貰って10年と自己紹介した後，一番困ったのが江戸弁で，同郷者には形式的江戸弁派と実質的江戸弁派があり，自分は後者で，本格的に発音矯正をしたから成功したと述べる。ここには弘前手織，木造の音調，津軽人と，懐郷的語句が並んでいる。

中程に「先日，自分の預かって居る学生百三十名に対して一斉に除名処分をして大分新聞の御厄介になった」とある。これが執筆を依頼された機縁だろう。今の東京の学生はガラスを破ると

証拠が残るから大勢で嘘をして先生を困らせる智慧はある「女みたいな奴」だと罵り，血気盛りに気の利いた喧嘩の一つも出来ない都会の青年に期待はかけられないと言った挙げ句に「どうやら僕等東北人が一肌脱がねばならぬやうな気もする。明治維新後の日本は薩長の手で支へて来たが，これから先はどうも彼等では覚束ないやうな気がする」といきなり飛躍して，後に選挙演説でも使った語句が出てくる。処分の真因などは触れてない。

一つ気になるのは，この「出鱈目の記」の見開き頁に「弘前音楽研究会大演奏会出演者」の写真があることで，19.9／1920と読める数字も写っているから演奏会当日の写真[21]である。総計16人，後列に立つ若手男女５人ずつは声楽演奏者だろう。前列に座る背広姿の中年５名は関係名士だろうが，中に神長倉がいるか否か，顔を知らないので判らない。居ないならここに掲げる意味が判らず，居るなら東京在住の神長倉が当日わざわざ弘前へ赴いたことになる。いずれにせよ意味不詳だが，神長倉探索では，この程度の不審は珍しくない。

5.　ダイヤモンドへ

大正12（1923）年３月，神長倉は早実幹事を辞任する。理由は不詳だが，不始末や勢力喪失ではなかろう。天野為之はその後終身校長として在職した。神長倉自身後に，武藤山治に随って政治運動を行なったと記し[22]ている。『婦人家庭雑誌』以来の繋がりや武藤のコネがあったためか，５～８月に『ダイヤモンド』に「新東京記」という署名記事を９回連載した。神長倉は結局文筆業に戻りたかったのだろう。当時能率論に没頭し，『科学的に研究した執務能率法』を一旦脱稿しながら，９月の関東大震災で焼失する奇禍に遭った。

ところが半年後の翌年３月には，そっくり書き直し，焼け残った印刷所を見つけ出して，652ページの本格的な著書として出版した。著者と発行者が同一なのはこうした出版事情のせいだろう。そっくり書き直したのは自分だけではない，カーライルだって仏蘭西革命史の原稿を友人の下女に燃されて書き直したと，威勢の良い序文付だが，本書についてはレフィングウエルを台本にしたためそれに捕えられているから，本年中に自分の体系による本を出す，と予告している。

因みにレフィングウエルはテーラーの工場管理を事務所に適用しようとした論客[23]で，管見の限り彼に注目した日本人は他にない。もともと神長倉は能率増進を国民的課題と捕え，能率思想の普及に尽力していたが，日銀での体験や早稲田実業学校での教育体験を踏まえて，事務所管理の重要性にいち早く気付いたのである。ところが義勇青年団の場合同様，時代先取りの度が過ぎた。その後もレフィングウエルの名を知る人は殆どいない[24]。テーラーは流行ってもレフィングウエルは覚えられもせず，神長倉の名もまた残らなかった。

この大著の直後，神長倉は５月の総選挙に，青森一区から実業同志会公認で立候補し惨敗した[25]。それが「馬鹿馬鹿しさ骨身に徹し」た主体験であろう。ところが同年７月に『能率学講話』，11月に『執務能率講話』を出した。『科学的に…』を自前の体系で書いた理論編と実践編である。これで年間３冊になるが，実は他にもある。『事務能率の研究』。これにはいささか説明が

要る。

神長倉の講演記録を大阪市が纏めたものだが，宇野利右衛門が主事である工業教育会の会誌『職工問題資料』にも分載された。こちらは最初が「事務能率の研究」で同資料のA，二回目が「事務能率の研究（二）」，以下また「事務能率の研究」で資料のDシリーズである。神長倉が書いたのでなく，速記に手を入れたくらいだろうが，ともかく単行本である。これを含めて全著書が12冊になる。

1924年11月，神長倉真民はダイヤモンド社に入社する。40歳に近く，既に4種の雑誌を経験し，主筆を勤め，数冊の著書を持つ大物記者である。

6. ダイヤモンド社内で

入社後，神長倉の名は本誌に2年間登場しない。出るのは大正15（1926）年11月から5回連載の，かなくら生「郊外電車めぐり」からである。前に類似の企画があって先輩記者連が書いていた。神長倉は一人で片づけているから筆力は注目されるが，これだけでは間が空きすぎる。同年5月に「同人消息」なる社内状況欄が新設され，これを神長倉筆と見れば空白は1年半になるが。

この欄は無署名だが，多くの記者が本名・筆名・渾名で登場するのに神長倉真民だけ名が出ず，時たま現れる海外子が差し引きで筆者らしく且つ神長倉らしい。「工場巡礼記」の筆者が海外生で，『財界巡礼記』の著者が神長倉真民だから，こう推測して良かろう。筆名は海外通のつもりかカイガイシイの駄洒落か。

さて，能率論に集中し，立候補もした年の暮の入社である。翌年は疲労もあろうし，青森で母つねを失い喪主を勤める[26]負担もあった。だがそれで，もう1年分の空白を説明出来るか。社の側は大物記者として特別待遇にした可能性があるが，本人の方が何も書かずに過ごせたのか。無署名か全くの変名で雑記事を書きなぐっていたとも考え難い。書評欄[27]を書く傍ら，『米国の金融市場』の準備方々アメリカ金融ウォッチャーでもしていたか。あるいは健康の制約か？

1929年の『米国の金融市場』は，バージェスの『準備銀行と金融市場』[28]に依ると記されているが，その他の書や観察を踏まえて書かれていて，翻訳と言うより翻案である。今では書名を知る人もないほどだが，きちんとした概説書であり，ダイヤモンド社から出版されて，社の売り物の一つとして扱われた[29]。

「工場巡礼記」は，これより前1927（昭和2）年4月，ダイヤモンド誌に3回連載した綿工場視察記で，批判的観察眼が伺える。これを下敷きとして膨らませたのが1930年『財界巡礼記』である。

この本の書名は羊頭狗肉で，実は日本綿業論である。マルクスが労働搾取的と描いた先進ランカシャー綿業を基準に，日本綿業の急速な追いつきを，ランカシャー綿業の傲りや日本の混綿技術といった話題を混じえつつ論じ，賃金が多少上がっても，我に産業的聡明ある間は心配ないと楽観論を唱える。後に日本資本主義の特殊性とされた類の大問題を含み，それに改良主義的思考

を加味している。ここでも神長倉は時代先駆的だったのだが，日本的慣習・思考・文化の面をナマに出しており，おりからの思想善導政策[30]に意図的に同調している。

しかしこの本の特色は，漫才調の対話の中に百科全書的博覧強記を鏤めていることである。漱石の「猫」を想起させるような雑学がある。

著名人の挿話がいくつか出てくる。ホイットニーについては，彼の綿繰り機の発明を，独立戦争の功労者グリーン将軍の未亡人が支援した，が，彼女は結局，ホイットニーに金は齎したものの彼を不評に陥れたミラーという家令と結婚したと，どこまで史実どおりか判らない面白噺がある。オーウェンについては，綿花飢饉で操業不振になった時にも，雇った職工に賃金を払い続けて男を上げたと言う。その綿花飢饉は南北戦争時のものと混同されたふしがある。オーウェンの綿花飢饉はおそらく1807年のそれで，彼が南北戦争まで生きていなかったことは神長倉も知っていたから，筆が滑ったのだろう。が，一般には産業革命史や工場法立法史についての神長倉の知識は相当に高水準である。

スミス・リカード・マルクスについては，まずマーシャルに依拠して，初めから経済学者たらんとした者は大した経済学者になれない，ミルを見ろと言う。スミスもマルクスも哲学者で，後に経済学者になった。リカードは株屋で，病気の細君を温泉に連れていって『国富論』を見付けてから経済学者になった。事実その通りだが，このレヴェルの経済学史的知識を神長倉はどこで仕入れたのだろうか。

もっと驚くのはマルクスについての雑学である。その生涯についても『資本論』についても舌を巻くほど知識があるが，中でも目を惹くのは以下の諸点である。1）.『資本論』の植民地論はウェークフィールドに依拠した。マルクス自身そう述べている—たしかに『資本論』第1巻第25章にはそう書いてある。2）．マルクスの理論的貢献は二つあると言うが，実は唯物史観だけである。剰余価値論はロードベルトスが先行した。—エンゲルスが『資本論』第2巻の序文で事実上ロードベルトス先行を認めている。3）．マルクス理論が時代に合わなくなった。合わせようとしたのがマルクス主義陣営の俊秀ベルンシュタインだった—ブルジョア・ジャーナリスト神長倉真民が修正主義論争を的確に捕えていた。その把握は何に由来するのか。4）.『剰余価値学説史』の編者カウツキーが，マルクスは取り上げた経済学者をあまりに口汚く罵っているので，表現を和らげた。—カウツキーの序文に事実そう書いてある。

戦後育ちのマルクス経済学者は何百人といるはずだが，中にこの神長倉雑学4点を全部知っているものが何人いるだろうか。現に筆者も，カウツキー編『剰余価値学説史』は持たなかったので改めて調べた。普通読まれる改造社版[31]は，『財界巡礼記』の翌年に出版されているから，神長倉の知識源ではない。もっと早期の訳となると，大原社会問題研究所が分冊で出版した邦訳[32]で，神長倉がその第一分冊から知識を得る機会は辛うじてあった[33]と推測される。逆に言えば神長倉は恐ろしく俊敏慧眼で，翻訳や英語文献を意外なほど多読していただけでなく，目学問耳学問，あらゆる機会を捕えてこのレヴェルの知識を蓄積していたのである。それが後の歴史研究で実をもたらしたものと思われる。

『財界巡礼記』の後神長倉は決定的に歴史に傾斜した。ダイヤモンド誌に昭和8（1933）年初から芋作「維新経済史抜き読み」を連載,「明治開化前史」を経て昭和13（1938）年に至る神長倉生「維新経済史」まで続け，結局歴史書3冊を著す。それが生涯最大の学問的業績である。が,歴史家神長倉真民については節を改める。当面は繋ぎの時期と，歴史と並行した『新興コンツエルン物語』に触れておく。

繋ぎの時期で目立つのは「芋作生」というペンネームが現れることである。昭和7（1932）年10～12月，ダイヤモンド誌に，芋作生「移れば変る世相行脚」が6回連載される。この芋作生が神長倉であることは，翌年から芋作「維新経済史抜読」が連載され，後に神長倉真民の著書となったことから確実であるが，主題や筆致だけでも神長倉筆と判る。これは題名通り，東京風景の推移の描写で，11年前，入社前の神長倉が書いた「新東京記」の続編とも見得る。

「新東京記」は多面的な東京風景から筆を起こしながら，すぐ東京市の行政問題に入り，4回続けたあげく，行政論が長すぎたと売春婦搾取問題に移ってまた4回続けて終わる。構成がまずいし，多分当初の意図に反して，深刻モノになってしまったのである。珍しく社外人の署名連載なのに「編集余録」の類に神長倉の名が全く出ないのも妙である。神長倉自身もこの不出来を苦にしていたのだろう。「世相行脚」は震災復興で近代化した東京風景の素直な描写である。

さてもう一点が『新興コンツエルン物語』。割に小型のダイヤモンド文庫に含まれる本で，父が息子に，流行り言葉となったコンツエルンを解説し，日曹・森・日窒・満業（日産）・理研の,共通性と特徴を明快に語る。ダイヤモンドとマガジンに書いたとあり，ダイヤモンド誌で理研3回，日曹1回，経済マガジン誌で日曹，森，日窒，理研を各1回扱っているのがそれだろうが,無署名や別署名で書かれているので，どこまで神長倉筆かが確認しきれない[34]。

目を惹くのが奥附の著者略歴である。資料として全文引用する。

「著者は曾て日本銀行に在り銀行実務を知り，早稲田実業学校幹事たること七年（ママ），聊か実業教育の実務にも通ず。大正十二年頃武藤山治に随ひ政治運動に奔馳せるも，その馬鹿々々しさ骨身に徹し再び近寄らず，大正十三年冬より昭和十三年六月までダイヤモンド記者として終始,その間左の著述をなす。『米国の金融市場』『財界巡礼記』『幕末経済秘史』『明治産業発生史』。目下維新以来の我が国力発展史の研究に没頭」

同書発行は1939年4月だから，神長倉は1年近く前にダイヤモンド社を退職していた。なお大著を企図して意気軒昂，経済マガジン誌には別の主題で歴史物を連載しているが，おそらく既に健康上大きな制約が生じていた。鮮やかだが軽目の本になったのはそのせいだろう。実はこれが神長倉の経済記者として唯一の著である。『財界巡礼記』よりは経済現況に徹している。神長倉は高橋亀吉と違って，エコノミストに徹しなかった。これも埋もれたまま終わる一因だった。

7. 歴史家としての最後

神長倉真民の歴史家としての業績は，前二稿[35]で紹介した。細部の不完全は多々残り，筆者

が歴史家でないため紹介に均衡を失するところがあったであろう。それでも神長倉のこの面はかなり既知になったはずだし，後に別途論じ直す機会もあろうから，ここで全面的に繰り返すのは避ける。

神長倉は，若い時から，エコノミストよりは歴史家を志していたのではなかろうか。学歴や職歴からでは逆に見えるが，歴史志向があったことは『義勇青年』や『日本一』に書いた文章に歴然としている。能率論や視察記に集中していた頃にはエコノミスト志向が強まったとも言えようが，そこにも歴史志向が伏在したし，事務管理論は時代先取りが過ぎて世にウケず，エコノミストに徹する機を逸した。ダイヤモンド入社後も歴史家志向を保っていたことは同僚若手が書いており[36]，『財界巡礼記』にも現れている。「新東京記」での借りを返した後は，大物記者としてのびのびと，芋作「維新経済史抜読」から神長倉生「維新経済史」に連なる歴史物を連載した。それは経済誌としてはオマケの中間読物である。その後神長倉が経済記者として腕を振るったとしても，無署名のコンツエルン論に過ぎず，歴史物の連載が彼にとって本業になっていた。そして他方，連載物は本誌の売り物記事になっていたようである。

この時彼は，「街頭の歴史家」と自称し，学者を時に冷笑[37]しながら新資料の発掘や意味づけに基づいて，新たな問題を提起し続けた。岸川家文書[38]や川勝家文書[39]は，彼が物的に発見したわけではないが，光を当てて活かした意味では発掘したのである。彼自身資料発掘に情熱を燃やしてもいた[40]。資料発掘に際して，彼の百科全書的博識・慧眼・俊敏が大いに有効だったであろう。歴史解釈が完全に首尾一貫したわけではない。が，資料的根拠ある議論を心がけていた[41]ことは明らかである。

神長倉の歴史観については，前稿で大まかに推測しておいたが，本稿の探索によって一層明確になったであろう。神長倉は日本の国家的発展や近代化は支持するが，維新史となると屈折する。それが，勝てば官軍史観を排して，歴史解釈に深みを与えた。屈折が出自によることは容易に推測できる。近代化支持だから明治政府も天皇制も支持する。しかし薩長独善に不満があり，長続きしないと思ってもいる。会津藩士の血を引いているらしいし，そうでなくとも白河以北一山百文と蔑まれた東北地方の出身としては当然であろう。大隈・天野・武藤の影響も考えられる。

その神長倉真民は，最後の書『明治維新財政経済史考』を，書き上げながら本にならないうちに亡くなった。昭和18（1943）年6月付けの序文に言う。

「本書の腹稿は数年前に出来てゐたが，その後私は，眼疾のため著述を断念してゐた。然るに，大東亜戦争の勃発は，私をして自分の視力などを顧みる遑あらしめなかった。徴用令の外にハミ出してゐる私としては，ささやかではあるが，多年の研究による文筆の奉公以外に御国に尽すべき方法はない。最後の視力の消ゆるまでと決心して，この筆をとったのであった。」

補足が必要であろう。腹稿とは，ダイヤモンド誌に連載した歴史物が，昭和13（1938）年には「維新経済史」として太政官札論にまで及んでいたのを指すと見て良い。「維新以来の我が国力発展史」が，これに続くものとして構想されていたであろう。著者はその後目を悪くしたと言う。既に示したように，1938年半ばでダイヤモンド社を退職し，翌年には経済マガジン誌にも書かな

くなった。その前に結構楽しい歴史読物を二点書いている[42]が，後は小型の『新興コンツエルン物語』を纏めたに過ぎない。齢ようやく50。文筆家としてこれから花開く頃になって，執筆困難に陥ったのである。単に目が悪かったのか。全身衰弱ではなかったか[43]。

出版を決意したと述べる部分は，レトリックこそ戦時体制的だが，いつもの颯爽登場というより強い悲愴感が漂う。失明によって最後の執筆になる予感が，生来の文筆家神長倉真民を捉えていたであろう。あるいは生命が尽きかけている感覚を，眼病に仮託して述べたのかも知れない。

翌月はじめ，神長倉真民は他界した。時に58歳２カ月。還暦にまだ間があった。死因は知り得ない。本が完成するまでになお４カ月余りかかった。最終校正など著者の仕事が残っていたかも知れない。残ったとすれば，女婿でジャーナリストの須貝正義が担ったはずだと言う[44]。

註

1）馬場宏二「ロバートソンの署名」大東文化大学『経営論集』10号，2005年９月。

2）馬場宏二「神長倉歴史学の魅力」大東文化大学『経営論集』11号，2006年２月。

3）管見の限りで，神長倉を引用した歴史学の研究文献は，石井孝『明治維新の国際的環境』1957年，吉川弘文館（増補改定版1966，1973年），金井円「小栗忠順の対英仏借款に関する岸川家伝来文書の再評価」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和45年度の，実質的には２点に過ぎない。いずれも神長倉が岸川家文書第３号を引用したことで『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』を挙げている。

4）立脇和夫『在日外国銀行史』1987年，日本評論社，同『明治政府と英国東洋銀行』1992年，中公新書が，神長倉著『明治維新財政経済史考』を挙げている。立脇氏の引用が歴史学界にどれだけ影響したかは不明だが，氏が生粋の学界歴史家でないため，さほど大きくなかったと考えられる。

5）高村直助『明治経済史再考』2006年，ミネルヴァ書房は，神長倉の名を上げ，『明治産業発生史』を引用した。同書25，49ページ。

6）いちいち名を挙げる必要もあるまいが，大学図書館で普通に見られる姓氏辞典，人名辞典，著者名辞典の類を都合30点ほど当たって見た。神長倉真民は全く出て来ない。例外は，『難読希姓辞典』が神長倉を「かなくら・かみながくら」と併記し，『新訂増補　日本著者名人名典拠録』2006年，日外アソシエーツが神長倉真民「かなくらまたみ，『明治産業発生史』1936」としているだけである。いずれも不完全で誤りを含み，役に立たない。

7）『浪江町史』1974，（二〇　室原村）p.431。

8）早稲田実業幹事神長倉真民「出鱈目の記」『陸奥の友』大正10年１月所収。

9）早稲田大学系属早稲田実業学校『早実七十五年誌』1976年，およびパンフレット『早実七十五年誌追補』1982年。

10）同校『百年を彩る人びと』2001年。

11）『早稲田大学商学部百年史』とくに巻末年表。

12）上掲『百年を彩る人びと』

13）ダイヤモンド社『二十五年史』1938年，『七十五年史』1988年。

14）『東奥年鑑』昭和４年・７年版の「県外で活躍せる県人」欄に，神長倉真民，青森市生れ，住所東京市小石川区音羽７－３，ダイヤモンド社員とある。記事は正確だが肌理が粗い。これ以外の年版にはこの欄自体が見当たらない。

15）８月時点では，青森時代の神長倉について筆者には何も判らなかった。それは全て，戸塚夫妻の

ご尽力と『東奥日報』９月２日の記事への反応から得られた。

16）弘前大学教育学部付属小学校『同窓生名簿』1977年，16ページ。『東奥日報』松田編集委員経由の情報。

17）高橋是清の佐賀英語教師時代の生徒が天野為之，天野の建言を高橋副総裁が容れて日銀が私学出を初めて採用した。神長倉の身分は書記。書記補に三木武吉がいた。私学組は洋服を調えられないほど低給だった。参照，ダイヤモンド誌，昭和11年１月21日，随筆「高橋蔵相と芋作」

18）神長倉の婦人雑誌創刊に天野為之が尽力し，高橋の口を通じて財政支援まで計らったことは上掲随筆から判る。が，誌名は全く判らず，特定出来たのは前田司書の機転のおかげである。

19）上掲『早実七十五年誌』169ページ。

20）上掲『百年を彩る人びと』巻末年表。

21）弘前音楽研究会は西洋音楽普及を目的とした市内教員有志による1917年設立の組織。当初声楽部だけで，管弦楽は青森音楽協会に頼った（『弘前市史明治大正編』）。大正９年９月16日の『弘前新聞』に，同月18日に弘前音楽研究会主催音楽大会開催の予告記事がある由。弘前市立図書館木村司書による。

22）後出『新興コンツエルン物語』の「著者略歴」

23）W. H. Leffingwell, *Scientific Office Management*, 1917.

24）高宮晋編『体系経営学辞典』1962年，ダイヤモンド社，にはレフィングウエルの項があり，Leffingwell, William Henry（1876－1934）カナダ生まれ，ミシガン洲グランド・ラピッヅの高校卒業，生産部門に適用されていた科学的管理の原理をオフィスにも適用できることを証明した最初の人。著作は今日なお事務管理論における標準的な業績，として著書６冊を挙げている。管見の限りでこれが最も詳しい邦語文献であり，この後さらに忘れられたようである。なおこれについては岡本康雄東大名誉教授の知見を伺った。

25）『東奥日報』経由情報。同紙，大正13年４月16～20，22，23，30日，５月４，５，８，12日：『青森県議会史　自大正２年至大正15年』954，５ページ。工藤鉄男936票，田中勇三715票，神長倉真民22票。工藤派から神長倉に対して目に余る選挙妨害があったようだが，それで当落が決まったのではなかろう。

26）常光寺の記録。次註で挙げる文章を手掛かりとした戸塚氏の調査結果。

27）ダイヤモンド誌，大正15年３月１日号の「新刊批評」で，K生が『実業読本』を取り上げながら「久振りで武藤さんの温容に接」したと武藤山治を懐かしんでいる。この文は神長倉筆に間違いない（ここに，去年母を亡くした，とある）が，他の無署名書評のどれを書いたかまでは判定できない。

28）Warren Randolph Burgess, *The Reserve Banks and the Money Market*, 1927. 同書は日本でも注目され，1928，1929年に続けて翻訳が出た。神長倉の『米国の金融市場』はそれらと競合したであろう。

29）ダイヤモンド誌1931年４～６月総目次の裏にダイヤモンド社の出版広告があり，中に神長倉の『米国の金融市場』と『再版能率学講話』が，石山賢吉・阿部留太・安田与四郎ら同社生え抜きの大物記者の著書と並んで掲げられている。

30）因みに文部省が思想善導政策を始めたのは1928年である。

31）マルクス，向坂逸郎訳『剰余価値学説史』1931年，改造社。

32）マルクス，森戸辰男訳『剰余価値学説史』第一分冊，大原社会問題研究所パンフレット19，1925年４月15日刊。

33）ダイヤモンド誌，大正14（1925）年５月21日号新刊紹介で，上記邦訳を「ただにマルクス研究者のみならず一般経済社会人士に対し切に購読を希望する」と褒め上げている。無署名だが文体は神

長倉ではない。だが同分冊が編集部のデスク上にあって神長倉が目にする機会があったことはまず間違いあるまい。

34)　『経済マガジン』誌を本格的に検討するゆとりが今ない。後日を期す。

35)　前掲註１)「ロバートソンの署名」，註２)「神長倉歴史学の魅力」

36)　ダイヤモンド誌，1935年８月１日。

37)　ダイヤモンド誌にも『財界巡礼記』にも学者冷笑がある。が，蜷川新の小栗上野介賛美に対する，資料操作批判を手掛かりとした攻撃は，有意ではあれ，筆致が冷笑の域を超えている。神長倉は小栗には同情的で，小栗解釈についても有益な指摘を何回か行なっているが，学者蜷川が手続き不備のまま姻戚の小栗を神格化して世に持て囃されることに我慢できなかったのだろう。歴史作家長谷川伸や実証史家武藤長蔵に敬意を表しているのとは対照的である。参照，神長倉生「万華鏡」ダイヤモンド誌，1935.１.11～３.１.

38)　岸川家文書については，前掲拙稿「ロバートソンの署名」。とくにその内の№３塩田三郎訳，が問題にされてきた。

39)　川勝家文書の意味づけについては前掲拙稿「神長倉歴史学の魅力」を見よ。

40)　参照，ダイヤモンド誌，昭和７（1932）年，１月11日号。拙稿「神長倉歴史学の魅力」63ページ。

41)　官軍が江戸を焼かなかった理由として，ダイヤモンド誌昭和８（1933）年２月１日号ではパークス干渉説を唱え，昭和10（1935）年３月１日号の「万華鏡」では，蜷川のパークス干渉説を明確に否定した。木梨資料と新提出の渡辺資料の優劣から，干渉説を誤りとしたのだが，自らは通説の勝・西郷説得説に復したことになる。自説変更に触れないまま新資料を持ち出して論敵に勝とうとした。せっかくの労作が評価されなかったのは，こうしたジャーナリスト的危うさのせいだったか？

42)　「明治維新と遷都」，「わが警察制度と西郷南洲」，『都市問題』24巻１号，２号，1937年１月，２月。

43)　神長倉は40歳過ぎには糖尿病を患っていた。参照「工場巡礼記（１)」。50代後半に筆力が急激に衰えたのはそのせいではないか。

44)　筆者の質問に対する神長倉伸義氏の回答。

2006.　８．７～８．21
９．24～10．30